レトリカルコミュニケーションと言語についての幻想

畑山浩昭

キーワード： コミュニケーション，レトリック，ディスコース，言語

はじめに

言語は，その本質と機能を探る研究の中で，現実をシンボリックに表象する記号としての位置づけがなされてきた．一方でレトリックは，表象記号の運用とその効果を取り扱ってきたが，哲学的側面から精査される時，事実を歪曲する術としての非難を受けてきた．ところがこの言語論とレトリック論のパラレルな議論が接点を発見し，現在では「言語とレトリックにより産出される説得的ディスコースが現実を作り上げる」という論点に立ち，皮肉にも哲学的な見解として受け入れられている．

現実世界とは別の所で，記号を中心とした総合的表象行為が「真実」あるいは「現実感」を作り上げていることがわかってきているにもかかわらず，「信頼できる道具としての言語」あるいは，「メッセージが伝わるはずのコミュニケーション」という見解は，一般的に変わっていない．初等教育から高等教育にいたるまで，コミュニケーション教育では，スキルとしての教授と演習が行われ，「話し方」「書き方」といった枠組みで，授業が行われている．

本稿では，この言語やコミュニケーションに抱いている期待や常識の「ズレ」を問題視し，コミュニケーション研究，特に，レトリック研究の成果を整理し，これからのコミュニケーション教育政策の可能性を考察する．

1.　コミュニケーション教育とレトリック

1.1　現代のコミュニケーション

現代社会では「コミュニケーション」という用語が多岐にわたり使用されている．代表的な使い方は，コミュニケーションが，ことば（自然言語）を使ってメッセージを伝達したり，意味を確認したりすることを意味する場合である．対人コミュニケーション，英語コミュニケーション，国際コミュニケーションといった複合語も，それに準じた使い方である．

情報を伝達するメディア媒体を意味する語としても使われるようになった．多くの雑誌やインターネットの様々なサイト，通信を業務とする企業等の名称に「コミュニケーション」が使用されている．また，芸術や制作といった総合的な創造活動，あるいは言語を使用しないアート等も，コミュニケーションと呼ばれることもある．

このようなことから考えると，コミュニケーションは一義的にとらえられるものではないことがわかる．以前は，「コミュニケーション＝意思疎通（意思・思考・感情の伝達）」といった比較的単純な構図が，社会通念としてあったように思えるが，この一義的な解釈だけでは，多様なコミュニケーションの現象を説明することはできない．「意思疎通」という熟語が指し示す対象は，人間と人間が会話を通して意味を伝えあう，確かめあうといった範疇のことである．

しかし現代社会では，時間や空間を超越した情報通信技術が発達し，コミュニケーションへの人間の関わり方が，大きく変化している．同じ時間と空間に存在し，お互いの表情を見て，声を確かめながら会話をする場合には，その時間的，状況的コンテクストの中で，メッセージや意味を確かめる．場所や時間を共有しない，断片的な情報の往来が頻繁におこっている現代では，誤解や意味の偏りが生じ，メッセージを伝えることよりも，「メッセージを解釈することに相当な努力を要するコミュニケーションスタイル」となったのである．

1.2　コミュニケーション教育の問題

このような問題を解決すべく当然の流れとして，より確かな解釈を可能にするためのコミュニケーションの方法論や教育論，より説得的，効果的なディスコースを構築するための手法等が，啓蒙的に論じられる結果となった．特にビジネスと学校教育の場において，コミュニケーション演習の占める割合が大きくなっている．ビジネスについて例を出すと，顧客の購買意欲を高めたり，契約締結を勝ち得るためのストラテジーとしてのコミュニケーション技術に関して，数多くの図書が出版されている．また，多くの企業において，コミュニケーション研修が開催され，接客マナーから販売技術まで，コミュニケーションを中心として教育されている．

一方，学校教育現場でも，カリキュラムにコミュニケーション教育を積極的に取り込むようになり，総合学習や語学の時間等を利用して，スピーチ，ディスカッションといったコミュニケーション実習が行われている．「効果的なコミュニケーションを戦略的に行わなければ他人には伝わらない，他人を動かせない」という考え方が前提となっているのである．

しかし，社会的にコミュニケーション意識が高まる一方で，コミュニケーション学としてのコミュニケーションそのものの研究に重要な問題が発生している．コミュニケーション行為の望まれる結果，つまり，「メッセージが相手に伝わる」とか「人を動かす，あるいは，人に特定の決断をさせる」といったゴールが重視されるあまり，その手段ばかりにスポットが当てられ，手段を遂行した当然の結果として期待される，対象者へのコミュニケーション効果の絶対性（あるいは保証）を強く求める風潮があるのである．言語やコミュニケーションの仕組みを理解した上で，効果的なコミュニケーションのあり方を模索することは大事であるが，ビジネス戦略や自己表現，ディベートなどに有効な「絶対的なコミュニケーション手法」を「説得する方法」として一般的に教えられることに危険性を感じ

るのである．そして，多くの場合，「レトリック」の名の下に，これが語られるのである．

1.3　レトリックに対する誤解

コミュニケーション研究の大きな貢献は，私達の使用する言語や認知器官，脳や心理の本質と機能を明らかにすることによって，コミュニケーション行動の限界を知り，多種多様なコミュニケーション活動の中で誤解が起こるしくみや，多様な意味が発生する原因を明らかにしてくれたことである．さらに，レトリック研究では，古典からの課題であった「人を説得する手段を発見し，実践する技術」から，「なぜある特定のディスコースが結果的に説得性を持ち得たのかを理解するための分析理論」として変化してきたのも，総合的なコミュニケーション，またはディスコースの研究の結果と言っても過言ではない．したがって，現在の風潮に見られる「人を説得し，意のままに動かす絶対的な手法としてのレトリック」は，コミュニケーションやレトリックの学問的歴史からみると，完全に逆行していることになる．

さらに，本当に効果があるレトリックとは，レトリックを使用していると悟られないレトリックである．政治家や評論家のスピーチに対して，「あれはレトリックだ」などと揶揄されることがあるが，それは否定的な意味が込められていると同時に，真意ではないと悟られているコミュニケーションである．「具体的なコミュニケーション手法としてのレトリック」と定義されることは，それ自体レトリックとして認識されるので，レトリックとしての効果は，あまりないのである．レトリックと悟られるディスコースに力が宿るわけがない．

話し方や書き方がある程度マニュアル化され，そのマニュアルに沿ってなされるコミュニケーションスキル教育自体は，リテラシーとしての価値があるだろう．しかし，その手法が，絶対性を持った一定の効果を必ず産出するかのように教えられると，実は期待にそうような効果が得られないことがわかる時，また新たな誤解を生む事になる．つまり，「レトリックは役にたたない」「まやかしである」といった誤解である．

1.4　説得性・ディスコース・コミュニケーション教育政策

レトリックと悟られないディスコースが最も有効なレトリックであるとすると，手法として解説されるレトリックほど，レトリックの本質からほど遠いものはない．この問題は，レトリックがその変遷の中で常に問題となってきた，レトリックの本質論に関係するように思われる．したがって，レトリック自身が含有する問題の本質を，その歴史的変遷の中で分析，理解した上で，現代社会のコミュニケーションに対する私達の態度を問い直す必要がある．

ビジネスや教育の場でコミュニケーションが重視されている背景には，コミュニケーション行動の結果が，直接的にビジネスの成功に反映したり，コミュニケーションスキルの習得が教育的成長の目に見える効果として取り扱われるからであろうことは前述した．しかし，コミュニケーションを構成する重要な要素である言語や心理等の本質と機能を理解

しないで，効果があるとされている手法だけを，強力なレトリックとして，その期待できる効果とともに教育することは，弾丸が入っていると信じ込ませて空の銃を戦場に持って行かせるようなものである．空砲を撃ったその人は，二度とその銃と銃を持たせた人を信じないであろう．

次章以降で，レトリック研究の成果と，コミュニケーション教育の政策が，合致する事を念頭において，そのあり方を探る．レトリックの変遷を，「説得性」というキーワードで物語り，検証する．その中で，言語についての幻想を指摘し，言語そのものが持つジレンマとレトリカルディスコースにより創造される，より現実味を帯びた世界の関係を探りながら，真実らしさと説得性の関係を明らかにする．これにより，説得性というテーマでディスコースを分析・生産する能力を育成することが，新しいコミュニケーション教育政策につながることを提言する．

２．　レトリックの本質的な問題と変遷

2.1　レトリックの古典

レトリックの定義の中で，最も古くかつ一般に浸透しているものは，「説得術としてのレトリック」である．これは，紀元前のギリシャで，ソフィストと呼ばれる人々が，地域の教師的存在として，説得的ディスコースを生産しながら教育にあたった事に原点があると言われている．ポリスにおける，民主的な社会集団作りと政治的リーダーシップの必要性を考えれば，大衆を説得し特定の方向に向かわせる術としてのレトリックが重宝されるのは容易に想像できる．プラトンの著作「ゴルギアス」に見られるように，人気のあったソフィスト達は，自分達の話術に相当の自信を持っていたようである．

アリストテレス（Aristotle）やローマのキケロ（Cicero），クインティリアヌス（Quintilianus）等が，レトリックを理論化する業績を残して，徐々に体系化された．レトリックを「説得するためのすべての有効な手段を見つける術」とする，アリストテレスの見方が，クラシックレトリックの代表的な定義である．

アリストテレス以降のレトリックは，「発想，配列，修辞，記憶，表出」という５つの領域から構成されていた(ただし,これらの用語についてはいくつか異なる日本語訳がある)．ディスコースはプロセスであり，これらの領域のひとつひとつで，説得性を練り上げ，最終的に説得的なディスコースを構築することができるとされた.「発想」の段階では，与えられたトピックで話をする際に，最も有効な議論を発見することが要求される．論理的思弁を要するステージである.「配列」では，最初の段階で発見された複数の議論を，最も効果的に並べる順序を決定する．ここでも，「何のための説得であるか」を考慮し，情報を配列しなければならない．さらに，「修辞」では，オーディエンスやディスコースの種類によって適切に編集される表現の形式とその影響が練られる．そして，自然なスピーチを行うために，全体を覚えておく「記憶」の段階に移る．そして，実際の「表出」では，特に発

話者の信頼度を高めるための声や表情，服装，ジェスチャーなど，非言語コミュニケーションの要素等が研究される．特筆すべきは，５つの分野が総合的，有機的につながっており，ひとつの説得的なディスコースを作り上げるための全体的な活動であるということである．

これらの領域の中で，さらに細分化された研究もなされた．人間が説得性を感じ取る心の反応として，ロゴス（理性），パトス（感情），エトス（信頼性）の三つの部分に訴えることが効果的であるとされた．つまり，人々は納得したり説得されたりする時に，これらみっつのどこかにアピールされている時だとする考え方である．話し手が，その話す内容について信頼できる人物であり，論理的に訴えられ，感情を理解されると，その話にうなずくといった様なことである．また，異なる種類のディスコースに最も要求される弁論の形式と特質についても研究され，それぞれ法廷弁論，議会弁論，演示弁論といった分け方で，方法論が体系化された．これにより，過去を事実として物語る手法，将来のビジョンを示す手法，無意識に通り過ぎる現在という時間から，共有するべき魂や，発掘されていない問題を発見，表現する手法等が考え出された．さらに，すべての人々に共通して説得的である事柄も探究され，「トポス」として整理された．

2.2　レトリックの正当性

このように，説得を目的とした手法としてのレトリックは，理論として体系化されていったが，レトリックの「正当性」については，当初から議論が分かれていた．プラトンは「ゴルギアス」の中で，ソクラテスとゴルギアスの対話を通して，レトリックのあり方を痛烈に批判している．特にその前半部で，ソクラテスがゴルギアスに，レトリックとは何かについて質疑応答を展開する中に，プラトンがレトリックに対して抱いている不信感を読み取る事ができる．ゴルギアスはレトリックを「言論」とし，特に，「説得する技術としての言論」をレトリックが取り扱う対象とした．これに対し，ソクラテスは，医学や体育学がそれぞれの専門領域を持っているのに対し，レトリック独自の専門といえる研究対象領域がないこと，さらに，レトリック的言論が，専門家ではなく，一般大衆（素人）を説得するためのものであることなどをゴルギアス自身に確認させながら，専門分野としてのレトリックが，いかに「まやかし」であるかということを対話の中で論証していく．

プラトンは哲学の立場から，真理や真実を追求し，理想とするイデアの世界と現実の世界を区別した人物として知られているが，「ゴルギアス」の中でも，同じような観点でレトリックを理解しようとしている．すなわち，ゴルギアスとソクラテスの「対話」という形式は，ひとつの疑問にひとつの答えというシンプルな構図である．もちろん，アイデアとしてのレトリックは，崇高かつ正しいものでなけらばならない．ソクラテスはこのアプローチで，ゴルギアスが主張するところのレトリックを分析していくが，結果的に，レトリックの中身が，知識や思想ではなく，何か他の専門的な事柄に付随することばの技術だけが残り，さらにその技術も，プラトン的な気高い理想に近づけるようなものではなく，「無知な大衆を巧みな言論によってある方向へ導く」という，哲学や学問の名にふさわしくな

い，下劣な技術としてとらえらていくのである．真実や事実をあまり問題とせず，人々を説得する事ばかりを追求するレトリックは，社会の元凶とされたのである．

このようなことから，レトリックは，哲学，思想，心理，社会などの学際的な様々な問題にきちんとこたえなければならないという課題を残しながらも，その一方では，言論の力，すなわち，特別な言語使用が人間の思考や行動に強烈なインパクトを与える事実を取り扱う分野として，試されはじめるのである．ソフィスト達の使用するレトリックが,「まやかし」であったとしても，ソフィスト達の言論が説得的で，多くの人々に影響を与えたことは事実なのである．これが，現在までのレトリック論の変遷の原点と言える．レトリックを擁護する側も非難する側も，プラトンが提示した問題を基準として考える事ができるのである．

2.3　アリストテレスとキケロのレトリック

アリストテレスは,「Rhetoric」の中で,レトリックを次のように定義できるとしている．

> Rhetoric may be defined as the faculty of observing in any given case the available means of persuasion. . . But rhetoric we look upon as the power of observing the means of persuasion on almost any subject presented to us; and that is why we say that, in its technical character, it is not concerned with any special or definete class of subjects (153)

この部分を日本語では,「説得する手段を見つけだす術」あるいはそれに準ずるような訳が,見られることがあるが，この英訳では，"the faculty of observing..." となっている．つまり,「能力」としている．英語の "observing" をどのようにとらえるべきかといった問題もあるが,「どのような事例であろうとも，説得手段を見いだす能力」とする定義は，プラトンが批判するレトリックの問題から「人間の能力の問題」に移されていることがわかる．

レトリックを「能力」とすることにより，その本質は「人間が修得するもの」となり，問題は,「どのようにしたら身につくか」という議論になる．そのためには「説得性を見極める能力」を持たねばならない．与えられたケースを見極め，何が説得的であるかを分析し，見いだす能力を身につけるために，アリストテレスは多様な理論を提示している．「Rhetoric」の中で，アリストテレスが最もクレジットを置いているのはロゴスであり,「論理による証明」が説得性を高めるのに最も重要であるとしている．"proof" という語が何回も出てくるが,このことばにはプラトンが力説するイデアの世界にあるべき「真理,真実」に対し，現実世界の人間が真理に到達する能力に限界があることをふまえた上で,「論理的証明」により,「真理に近づく」ことを強調しているのである．つまり，人間的努力による "proof" が神の "truth" に近いということである．

後のローマのキケロは，レトリックに対するプラトンの批判について，以下のようなコ

メントを残している.

> ...I mean Plato – whose *Gorgias* I read with close attention under Charmadas during those days at Athens, and what impressed me most deeply about Plato in that book was, that it was when making fun of orators that he himself seemed to me to be the consummate orator (207)

プラトンが書いた「Gorgias」によって，レトリックはまやかしであるという言説が説得性を持てば持つほど，プラトンがレトリックを批判するためのレトリックを用いたということになるのである．アリストテレスの「証明としてのレトリック」を用いると，プラトンは，レトリックが偽りの学問である事を証明するためにレトリックを使ったのである．

アリストテレス，キケロ，クインティリアヌスを中心に，思考と文彩の総合体系としてのレトリックが地盤を固め，１５世紀のルネッサンス時代まで続く事になる．プラトンが指摘した問題，つまり，「固有の独立した専門領域を持たないレトリック」についての議論は当然続く．しかし，「説得性は言論によって変わる，作られる」という絶対的な現象が，言語やコミュニケーションを研究する人々に認められるようになったことが，その後のレトリックの変遷に大きな影響を与えることになる．

2.4　科学的手法とレトリック

ルネッサンスの時代に新しい表現が模索される一方で，レトリックの論理的な部分，つまり，「発想」と「配列」が，ラマス（Peter Ramus）やベーコン（Francis Bacon）によって，より科学的な領域として取り扱うべきだとの議論がなされ，レトリックの領域は表現形式そのもの（日本語で修辞と訳される）だけに，焦点が当てられるようになった．ラマスは，レトリックの５分野があまりにも広範囲にわたるため，アートとしてのレトリックがぼやけているとし，「Arguments in Rhetoric against Quintilian」という議論の前半部で，次のようにレトリック論の方向性を説明する．

> We shall distinguish the art of rhetoric from the other arts, and make it a single one of the liveral arts, not a confused mixture of all arts; we shall separate its true properties, remove weak and useless subtleties, and point out the things that are missing (563)

レトリックを他の学芸から区別し，一つの学問にするべきであって，他の分野と混合してはならないという．アリストテレス，キケル，クインティリアヌスによってなされた体系を "a confused mixture" として暗に批評するものである．これは，レトリックを洗練し，余分な分野を切り捨てて，単独の分かりやすい学問にしようとする考え方であると同時に，レトリックを再定義しようとする試みでもある．その定義とは，以下のようなものであっ

た.

> There are two universal, general gifts bestowed by nature upon man, Reason and Speech; dialectic is the theory of the former, grammar and rhetoric of the latter. . . Rhetoric should demonstrate the embellishment of speech first in tropes and figures, second in dignified delivery (566)

ダイアレクティック（弁証法）による演繹的な発想・発見法，グラマー（文法）による正確性，そしてレトリックによる修辞により，実際のディスコースはまとめられるが，それを構成する個別の分野については，別々に分けて取り扱われるべきであるとする主張である．ラマスのレトリックは，その領域を文彩と表出に限って有効とするものである．

さらに，フランシスベーコンによると，レトリックの「発想」は，本当の発想ではないとされる．Invention は，発見であるべきで，何か新しい事を発見することを保証する理論でなければならないとする議論である．ベーコンは「The Advancement of Learning」の中で，次のように述べている．

> The invention of speech or argument is not properly an invention: for to invent is to discover that we know not, and not to recover or resummon that which we already know..... (626)

ラマスがまだ，アリストテレスの三段論法に頼っていたのに対し，ベーコンはむしろ，人間の思考活動だけによる発想，つまり，記憶の中に蓄積された情報だけで何か新しい事柄を見いだそうとする態度そのものを否定したのである．レトリックには「発想」といった分野は取り扱えないと主張した．

このように，１６世紀までのレトリックは，その取り扱うべき分野についての議論が中心で，それによりレトリックの定義も変わったと言える．レトリックが，どの分野にも応用できる知識である一方で，独自の分野を持てないジレンマが，その動的な本質を浮き彫りにした．リベラルアーツの各科目が専門的であるとすると，レトリックは横断的，応用的ではあるが，プラトンによる「レトリックは何を専門とするのか」には答えられないまま発展したのである．アリストテレスによる「能力としてのレトリック」という定義に基づいて，その説得性の研究と，修得すべきスキルの集大成として成長したのである．説得性をより深く研究しようとした結果として，ラマスやベーコンによる，レトリックの解体がなされたといってもよいであろう．いくつかの部分に解体され，それぞれが固有の専門性を持ち，深く研究されることによって，説得性が追求され，総合体としてのディスコースに還元されるからである．

2.5　言語が抱える問題とレトリック

１７ 世紀以降のレトリックは，取り扱うべき領域や専門性の問題ではなく，レトリックを構成する中心要素である言語の問題へと移っていく．言語はアイデアであるとするのはプラトンであったが，この思想はジョンロック（John Locke）によって，再度議論される事になる．ロックは「An Essay Concerning Human Understanding」の中で，私達は，人間が持っている「感覚」を通してアイデアを持ち，それに記号としてのことばを与えるが，ことばを使えば使うほど，アイデアは複雑になり，初期の感覚，つまり，現実世界への最初のリスポンスから離れていくことになると解説している（699-719）．つまり，レトリックは，不完全な言語を意図的に使用する諸悪なものとされるのである．

言語と本質と機能については，現在までの間にあらゆる側面について検証されている事は言うまでもない．しかし，レトリックの変遷に関する言語の特質として最も重要な言説は，「言語は現実を表さない」という議論と，さらにもう一歩踏み込んで，「言語運用が現実を作る」という主張である．真実や現実とは何であるかを追求する哲学者が言語について語る時，言語が真理・真実にたどりつく有効な道具であるかどうかを精査するのは当然であるが，その過程で，言語がいかに不完全なものであるかが証明されてきたのは皮肉である．例えばニーチェ（Friedrich Nietzsche）は，言語はいつでも主観的で，部分的で，価値を帯び，意図的であるとし，その言語を使用する限りは，哲学者は真理にたどりつけないと指摘している（Bizzell & Herzberg, 885-887）．つまり，言語そのものがレトリックであるとする主張である．２０世紀に入っても，リチャーズ（I.A.Richards）やケネスバーク（Kenneth Burke）等が，言語と意味の関係を探りながら，言語が物事と直接的なリンクを持っていないこと，ディスコースによってのみ意味が発生する事，ディスコースが人々をある心理的方向へと動機づけることなどを主張した．レトリックによってのみ，意味が発生するということである．

2.6　言語の幻想とレトリックの本質

コミュニケーション研究やコミュニケーション教育を考える上で，レトリックの変遷における「説得性」を理解しておかなければならない．前述したように，現代のコミュニケーションの研究と教育が，説得的コミュニケーションに興味を持っているからである．クラシックのレトリックが目指した説得性とは，まさしく大衆を説得するための説得性であった．しかし，「発見的ではなく，真理や真実を取り扱えないレトリック」が，大衆を正しい方向に導く事ができるかとう疑問から，諸悪なもとのしてみられるようになるし，レトリックの５分野が，それぞれ専門的な学問として分散し，総合的な力を失うとともに，レトリックの中心的要素である言語そのものの本質が明らかになることによって,「大衆を説得する術」としてのレトリックは影を潜めたのである．

レトリックの変遷の結果を一言で表すと，レトリックについての問題の本質が変わったということである.「レトリックは真理を発見できるか，取り扱えるか」といった議論から「説得的なディスコースが不完全な言語を使用するにもかかわらず，人々に影響を与えるのはなぜか」という議論に移ったのである．レトリックの５分野の中で，修辞に関する部

門は，ルネッサンス以降レトリックの領域としては残っているものの，修辞が与えるインパクトにより,「言語の使い方によりオーディエンスに与える影響が異なる」事実が確認された．一方で，言語そのものの研究成果として，言語によって事実，真実としての意味が伝わるというコミュニケーションの前提が，実は幻想であるということが証明されたのである．

言語が真理・真実を表さない，伝えない，あるいは，取り扱えないことが証明されながらも，なぜ人間は言語を使い続けるのか．もちろん，自然言語に替わるものを発明する努力はなされてきた．論理学や数学に使用される記号は，世界を客観的にとらえようとする新たな言語である．しかし，なぜ，不完全であるとラベルを貼られた日常的な言語はまだ消えていないのであろうか．それは，言語が人間にとっての真理・真実，あるいはアリストテレスのことばを借りると，真実らしく見えることを，レトリカルな言語運用が作り出すからである．つまり，現実世界を記号化し，表象する言語は，使用される事により「現実感」を創造し，その言語によるディスコースが作り上げた世界が「説得性」を持つので，たとえ，哲学的な真理・真実を表さないにしても，レトリック的には十分に真実，事実であり，現実性を帯びる事になるのである．言語はレトリックであり，レトリックが現実を作り出し,「現実として」私達に説得的に語りかけ，表象するのである．このレトリックが持つ「説得性」こそが，長い歴史の中でレトリックが生き残ってきた理由である．

3.　コミュニケーション分析手法としてのレトリック

3.1　ディスコース分析

特定のディスコースが持つ社会的，心理的影響を分析する手法として，ディスコース分析がある．この研究領域で使用される，ディスコースの最もシンプルな定義は,「テクスト＋コンテクスト＝ディスコース」である．つまり，言語によるテクストと，それにプラグマティックな意味を発生させるコンテクストをあわせて，ディスコースを理解しようとする研究方法である．よって，ディスコースは，コミュニケーション行為の連続と，そのコミュニケーションに関わる人々の意味理解のプロセスの問題であり，それを詳しく調べるために，社会学，心理学，文化研究などの関連分野も取り込んだ，学際的なアプローチがとられるのである．

研究者達がディスコースに関心を持つのは，ディスコースによって産出された世界が力を持つからである．一つの学説が他の学説よりも優れている事を主張するのも，証明するのも，広めるのもディスコースによってなされる．つまり，ディスコースが説得性を持つと，ディスコースによって表現された意味が力を持つのである．この「説得性」というテーマを最も研究してきた領域がレトリックであったので，ディスコース分析とレトリックが結果的に密接な関係を持ったのである．

3.2　レトリック的ディスコース分析

レトリックが見直された背景には,レトリックの研究対象が説得的ディスコースであり,説得的なコミュニケーションを作り上げる手法を研究した結果として，レトリックがディスコースについて分析すべき数多くの観点や構成要素を体系的に整理した学問だったからである．あるディスコースが力を持ち，その理由を探る時，レトリック的分析項目が役に立つのである．

レトリックに基本をおいたディスコース分析（レトリック批評）では，特にシンボルに焦点をあてて研究が行われる．フォス（Sonja K. Foss）は，レトリック批評を次のように説明している．

> Rhetorical criticism is the process of systematically investigating and exlainng symbolic acts and artifacts for the purpose of understanding rhetorical processes. This definition includes three primary dimensions: (1) systematic analysis; (2) symbols as the objects of analysis; and (3) a purpose of understanding rhetorical processes.(6-7)

シンボルを分析の対象にする意味は大きい．プラトンにしてもソシュールにしても，議論の出発点は，言語が現実世界を表しているのではなく，人間が言語をシンボリックに，恣意的に使用しているということであった．シンボルの連鎖が文を作り，文の連鎖がディスコースを作ることを考えれば，クロノロジカルに（時間の進行とともに）シンボルの鎖が表象となってあらわれ，その表象行為が人々に受け入れられる時，人々の心の中に「現実を作る」のである．つまり，シンボルが現実性，説得性を産出するのである．

例えば，レトリック分析のアプローチとして「クラスター批評」がある．これは，バークが発展させた方法で，ディスコースを産出した人の世界観を探り出すことを目的としている．以下は，フォスが説明しているクラスター批評である．

> In this method, the manings that key symbols have for the rhetor are discovered by charting the symbols that cluster around those key symbols in the rhetorical artifact. (64)

どのようなディスコース（ここでは個別のスピーチや文章）でも，キーワードがある．テーマやトピックに最も関係のある語句と言ってもよい．クラスター分析では，そのようなキーワードが，他のどのような語群とどのように連動して使用され，どのようなイメージや捉え方を創り出しているかを探り出す．例えば，成人式のスピーチ等で,「成人」が「責任」や「社会」という用語で定義され,「自覚」や「貢献」といったことばで色づけされるとき,「成人」というキーワードがディスコースにより，確固たる概念として聴衆に提示されるのである．

ディスコースやコミュニケーションの研究の中で，このような分析が主流になる背景には，コミュニケーション研究の積み重ねてきた結果が反映されている．つまり，「いかにして説得できるか」という問いから，「いかにして特定のディスコースが説得的になったか」という問いへのシフトである．オーディエンスやコンテクスト等を中心に考えることにより，いかにしてディスコースが真実味や現実感を持った表象と成り得たかを探るようになったのである．

4.　説得性の発見に重点をおいたコミュニケーション教育政策

4.1　発見させるコミュニケーション教育へ

説得的コミュニケーションを産出する方法として，レトリックの技術を教える事は無益ではない．しかし，説得性がディスコースプロセスの分析結果として把握される現代のコミュニケーション研究の成果をふまえて，異なるコミュニケーション教育を準備しなければならない．個々人が自分のディスコースを構築する際，説得性を自分で発見できるようなプログラムが必要である．なぜならば，説得性の発見は，個人の視点から始まるからである．誰が，誰に向けて，何のために，何を発するのかにより，ディスコースの内容になる情報の表象方法が異なり，これはコミュニケートする当人が気づき，工夫しなければならない問題なのである．

ひとつの方法として，言語についてわかってきたことを教育の中心に置く事が考えられる．言語運用（コミュニケーション）によって作り出される世界がよりリアルだからこそ，レトリックが強調され，言語そのものが現実を表していないことの裏返しであるということはすでに議論した．すると，説得を目的とするコミュニケーション教育は，昔からの手法を教えると同時に，レトリカルコミュニケーションが作り出す現実性の中に説得性を発見し，気付かせる教育を行わなければならない．シンボルの運用が，現実世界から離れた，人間の（オーディエンスの）精神世界で，別の世界を創造するプロセスを理解しなければならない．スキルとしてのコミュニケーション教育だけではなく，ディスコースプロセスを発見的に理解できるプログラムが，政策の中に含まれるべきである．

引用・参考文献

Aristotle. Rhetoric. Trans. W. Rhys Roberts. Ed. Friedrich Solmsen. *The Rhetorical Traditon*. Ed. Patricia Bizzell and Bruce Herzberg. Boston: Bedford Books of St. Martin's Press, 1990.

Bacon, Francis. The Advancement of Learning. *The Rhetorical Traditon*. Ed. Patricia Bizzell and Bruce Herzberg. Boston: Bedford Books of St. Martin's Press, 1990.

Cicero, Marcus Tullius. Of Oratory. Trans. E. W. Sutton and H. Rackham. *The Rhetorical*

Tradition. Ed. Patricia Bizzell and Bruce Herzberg. Boston: Bedford Books of St. Martin's Press, 1990.

Foss, Sonja K. *Rhetorical Criticism*. Illinois: Waveland Press, 1996.

Locke, John. An Essay Concerning Human Understanding. *The Rhetorical Traditon*. Ed. Patricia Bizzell and Bruce Herzberg. Boston: Bedford Books of St. Martin's Press, 1990.

Nietzsche, Friedrich. On Truth and Lies in a Nonmoral Sense. Trans. and Ed. Daniel Breazeale. *The Rhetorical Traditon*. Ed. Patricia Bizzell and Bruce Herzberg. Boston: Bedford Books of St. Martin's Press, 1990.

Ramus, Peter. Arguments in Rhetoric against Quintilian. Trans. Carole Newlands. Ed. James J. Murphy. The Rhetorical Tradition. Ed. Patricia Bizzell and Bruce Herzberg. Boston: Bedford Books of St. Martin's Press, 1990.

Richards, I. A. The Philosophy of Rhetoric. New York: Oxford U. Press. 1965.